教育借用理論を用いた地域的調和化に関する一考察

奥　田　久　春

要　　旨

本稿の目的は、比較教育学における教育借用理論の中で地域（region）という視点がどのように位置づけられるのかを探り、教育の地域的調和化（regional harmonization）がどのような契機や過程によって形成され、どのような影響が生じうるのかを考察することである。本稿では、Steiner-Khamsi（2012）が最近の比較教育研究から教育借用の新しい捉え方を分類する中で挙げている「調和化」に着目する。

教育の地域的調和化の形成には国際機関が媒体となっている場合もあれば、脱植民地化のような教育改革が契機となり、国際標準化が目指されることで調和化が進むこともある。しかしいずれにしても、地域においてそれらは単純な二国間の教育借用ではなく、相互作用的に学び合うものである。また、国という単位の教育政策は多層的なものとして捉えるべきであり、ローカルな視点でみれば、様々な文脈が考えられる。調和化による各国への影響についても、多様な様相を示していくと考えられる。

1. はじめに

本稿の目的は、比較教育学における教育借用理論の中で地域（region）という視点がどのように位置づけられるのかを探り、教育の地域的調和化（regional harmonization）がどのような契機や過程によって形成され、どのような形で、それが教育にどのような影響を与えるのかを考察することである。

筆者は拙稿（2019）において大洋州共通の後期中等教育試験 PSSC を論じ、地域共通の試験制度の意義について考察した。小規模国が教育資格の質を向上させ、国際的な認証を求めるために地域共通の試験が有効であることを論じた。

このように教育においても、国際レジーム論でいうような地域による協調や協力のための統合（山本、2008）が存在していることが確認できる。しかしながら、こうした統合が形成される契機や過程、また教育への影響を明らかにしていくために、まずは理論的枠組みを考察することが必要である。そのために教育借用理論が有効だと考えられる。

ある国の教育政策や教育制度はその国の社会状況に応じて整備、改革されていくが、必ずしもその国だけで独自に発展するとは限らない。他国に模範を求め、国を超えて移転されてきた。こうした現象は教育借用と呼ばれる [1]。

比較教育学によると教育借用とは、「比較教育学の発達史における、行政官による外国教育調査・視察に基づく教育諸現象の国際移植」であり、「教育政策の策定過程に盛んに行われる」（比較教育学事典、2012）ものとして説明される。この教育借用による教育のモデル化は古来より行われており、比較教育学の古典的な研究テーマでもあった。しかし、これらの主な焦点は 2 国間での政策の参照、移転であった。

これが、1990 年代以降にグローバル化の中での国境を越えた教育政策の移転に関する研究として行われるようになる。Steiner-Khamsi（2012）は最近の比較教育研究から、国家が脱構築される中での教育借用の新しい捉え方を次のように分類している。

① 2 国間で参照しあう枠組から国際的なものへの移行
　・有効期限を越えた政策が漸進的に脱領域化する過程
　・ネットワーク分析と主体特定の探求
　・調和化（強制的な政策移転の特別なタイプ）
②システムとケースの論理での理解
③ポリシースケープの方法論的波及
④国境を超えた政策誘引の投影的解読

この中で、本稿の趣旨である地域での協調や協力という点で「調和化」に着目するならば、そのための強制的な政策移転とはどのようなものなのだろうか。そして、調和化によってもたらされる「新しい地域的・国際的教育空間」（Steiner-Khamsi、2012）とはどのようなもので、その空間において「ローカルの政策や実践に何をもたらす」（同）のだろうか。

本稿では、現在主流となっている教育借用理論を紐解きながら、その中で論じられる政治的関係と教育借用の過程について整理し、地域的調和化に関する研究事例と照合しながら、教育の地域的調和化の形について検討し、そのことで、理論的枠組みの考察に繋げていきたい。

こうした教育借用についての理論的研究は比較教育学において行われているが、日本国内では管見の限りでも田中（2005）、佐藤（2018）らが見られるものの、ほとんど行われていないのが実情である。またアジア地域の比較教育やヨーロッパのボローニャプロセスなど地域における教育政策についての研究など少なくないが、教育借用理論を用いた地域の教育に関する研究は、日本国内ではまだ見られない。

2. 教育借用理論における政治学

教育借用理論を理解するためには、教育のグローバル化について捉えておく必要がある。グローバル化は常に統一化（Convergence）と多様化（Divergence）の 2 方向のいずれかで説明される。Spring（2008）はこれを、①世界文化論、②世界システム論、③ポスト植民地主義、④文化主義の 4 つの視点から考察しているが、先進国と途上国、宗主国と植民地、中心国と周辺国といった二項対立の枠組ではなく、相互作用を伴う教育借用という点で考えると、世界文化論と文化主義の 2 つの観点に整理することができる。前者は、世界政体における規範や価値の国際システムに一定のモデルを各国が採用するというものであり、例えば通学といった教育制度の国際標準化があり、合理的に借用されるという議論である。これに対して後者は、教育人類学の視点から世界文化論に懐疑的であり、借用しても各地においてそれぞれの解釈によって様々に変容するという議論である。

教育人類学的視点でなくとも、教育借用の過程では政治的利害関係が関係するという議論を展開したのは Phillips と Ochs（2003）や Steiner-Khamsi（2002）、Cowen（2009）による研究が有名である。これらの研究で焦点となるのは、教育借用における政治学であり、そこには教育改革というタイミングにおいてなされる、他国の教育の政治的な利用という視点が含まれている。政治的過程によって「ある文脈から別の文脈に教育が移転しても、異なる形で使われる」（Steiner-Khamsi、2012）ことになる。

Phillips と Ochs（同）は教育借用の過程を、誘引（attraction）、決定（decision）、実施（implementation）、内在化（internalization）という 4 局面のサイクルで示し、その中の政治学に注目した。Steiner-Khamsi（2002）は外在化（externalization）、再文脈化（re-contextualization）、内在化（internalization）として教育借用の過程を説明した。また、Cowen（同）は移転（Transfer）、翻訳（Translation）、変容（Transformation）という形で説明しているが、いずれも海外を模範にした教育を自国内の文脈に沿うように形を変えていく点が共通している。Steiner-Khamsi（2014）も輸出されやすい教育であっても受入れ側による翻訳が行われることを指摘している。

なお、外在化とは社会学者ニコラス・ルーマンのシステム論のオートポイエシスの相互作用と変換という概念から発展させたユルゲン・シュリーバー（2000）の理論から引用された概念であり、教育改革の理念を外国の教育に求め、国際性に関連付けることで「教育における意思決定を支える価値的判断を客観化」することである（田中、2005）。この客観化には政治的な意図が介在しているのである。

つまり、自国の教育改革を正当化させるために、海外の教育を持ち出し、それを移転するが、自国の文脈に翻訳し、内在化させることで変容した形として現れるのである。そこには政治的過程が存在するということができる。Steiner-Khamsi（2012）は政策研究と比較教育学との学際的な連携を提唱しているが、それは政治改革において、他分野や他国を参照することが行われるように、教育改革においても言えるからである。

3. 地域としての調和化

しかし、以上の理論では説明できないことが出てくる。外在化において対象とする教育の選択である。単に自国の教育の課題に対応しうるという理由だけでなく、課題を指摘し、解決に繋げる教育のあり方を決定する、何等かの枠組みや方向性は存在しないのだろうか。また必ずしも二国間で参照しあうとは限らず、参照元が特定の国とも限らない。

教育借用を輸入・輸出という二側面で捉えるならば、Steiner-Khamsi（2004）によれば国際的認証（資格）のために輸入するという側面があり、ビジネスとして教育を輸出するという側面がある。しかし、この教育の国際的認証は、また国際標準化に合わせるという意味もあるため、例えば国際機関による国際学力調査（PISA）などのように国際標準化に向けたグローバルガバナンスが出現しているとすれば、様々な形で教育を参照し合うことも起こりうる。

そうした国際標準化が行われる大きな空間の一つとして地域が機能することがある。例えば EU 域内での教育政策であり、また同じくヨーロッパでの国際学力テストによる標準化などである。先述の Steiner-Khamsi（2012）が紹介する最近の教育借用研究から、調和化についての研究を事例にして、どのように地域的調和化を理解することができるのか考察していきたい。

Robertson と Dale（2012）は、ボローニャ宣言以降の EU 域内での高等教育政策について、国を単位とする方法論的国家主義（Methodological Nationalism）の枠組みで教育政策が普及すると捉えることを批判的に考察し、教育借用の議論は、対象となる国の教育だけに焦点を当てるのではなく、多層的な分析が必要であり、域内における教育の移動（Mobility）だと捉えるよう提案している。

Grek（2012）は、ヨーロッパにおいて OECD や EC などが実施した国際テストの影響について分析する中で、各国間や国際機関間で教育政策を学び（policy learning）合う教育空間を論じている。そして、そこに存在するアクターの役割にも目を向けている。アクターは国内の存在であっても、一国内での活動に制限されるわけではなく、各国が国を超えて学び合うことに貢献するのである。

Silova は、1990 年代に東欧の国々がソ連による社会主義の影響から脱却し、ヨーロッパの教育空間にシフトするという西欧近代化を論じている。つまり脱社会主義国家は、ヨーロッパ東西を二項対立的に捉え、西欧の民主主義、市場経済というイメージに近づこうとしたのであり、グローバル化の流れとして西欧化を進めたのである。ここにヨーロッパという地域的教育空間が存在したと考えることができる。これを Silova は世界文化論と関連付けて説明しているが、一方で、文化主義との議論を踏まえつつ、世界文化論では見過ごすローカル化に目を向けることの重要性も指摘している。

こうした地域の教育空間と教育借用の捉え方はヨーロッパに限らない。Chisholm は南部アフリカにおける 1990 年代の教育改革の流れの中で現れてきた、地域としての共通性と違いを分析している。南部アフリカ、東アフリカの各国で起こった国家資格枠組（National Qualification Framework）と成果に基づいた教育（Outcomes-based education）の普及と南アフリカ共和国の役割についての研究（2007）や、同様にサブ・サハラアフリカでの 1990 年代以降のカリキュラム改革における学習者中心の教育などが普及したことに関する研究（2008）において、アフリカにおける地域的調和化を説明している。これは脱植民地化に向けた各国の教育改革の動きがあったことと南アフリカ共和国におけるポストアパルトヘイトに向けた教育改革が重要な役割を果たしてきたことを指摘しながら、国際機関や援助機関が加わり、学習者中心の教育などが普及したことを論じている。これら Chisolm の研究は、教育政策の中でもカリキュラムに注目している点が特徴である。カリキュラムはそれぞれの国の文脈の影響を受けやすい。それにも関わらず共通したカリキュラム政策が採られている点で、地域的調和化を見ることができるのである。しかし各国が採用した背景にはそれぞれの文脈があり、また旧宗主国や援助機関との歴史的な教育関係があったことを指摘しているように、必ずしも各国が同じプロセスで調和化したものではないのである。

更に別の事例を見ておきたい。カリキュラムという点では、国境を越えた中等教育修了資格試験が存在する。これにはイギリスのケンブリッジ大学（UCLES）の海外学校資格（COSC）や IGCSE だけでなく、カリブ海地域の CXC や西アフリカ地域の WAEC、大洋州の EQAP のような地域による共通の中等教育修了資格試験が存在する。Bray（1998）は、こうした中等教育修了資格のための外部試験を提供する地域機関がどのような働きをするのかについて、「経済規模、高度な専門性、国際関係における強い発言権を獲得するための手段」として「大きな存在に対する交渉力を増大させることができる」としている。また Taufe'ulungaki（1993）も「教育への自信を高めることで、主要国や他地域への依存を減じることができる」と説明するなど、特に教育制度が脆弱な国や小規模国にとって、地域的連帯は大きな意味がある。しかし、EQAP の前身である SPBEA が大洋州に提供してきた中等教育終了資格試験（PSSC）が 2013 年に廃止され、各国がそれを踏襲しつつ、独自に試験を実施するようになると、様々なローカル化が出現している（奥田、2018）。

4. おわりに

このように、地域とは教育借用理論の中で一つの教育空間として捉えることができ、教育の地域的調和化の形成には地域機関や国際機関が媒体となっている場合もあれば、脱植民地化、ポストアパルトヘイト、ポスト社会主義といった教育改革が契機となり、世界文化論のように国際標準化を目指さざるを得ないことで調和化が進むことがありうる。しかしいずれにしても、地域においてそれらは単純な二国間の教育借用ではなく、相互作用的に学び合うものであり、国という単位の教育政策も多層的なものとして捉えるべき空間であろう。

またローカルな視点でみれば、様々な文脈が考えられるのであり、各国の教育政策を見る際には、教育借用理論で論じられてきたような内在化のための政治的過程を見る必要性は無くなってはいない。まさに調和化による各国への影響についても、多様な様相を示していると考えられるのである。

そうしたミクロの動態をも観察、分析をしていくことが、地域的調和化の研究においても必要となるだろう。

主要参考文献

Bray, M. (1998) Regional Examinations Councils and Geopolitical Change: Commonality, Diversity, and Lessons from Experience, International Journal of Educational Development, Vol. 18, No. 6, pp.473-486.

Cowen, R. (2009) The transfer, translation and transformation of educational process: And their shape-shifting? Comparative Education, Vol 45, No. 3, pp.315-327.

Chisholm, L. (2007) Diffusion of the National Qualification Framework and outcomes-based education in southern and eastern Africa, Comparative Education Vol. 43, No. 2, pp.295-309.

Chisholm, L. & Leyendecker, R. (2008) Curriculum reform in post-1990s sub-Saharan Africa, International Journal of Educational Development, 28, pp.195-205.

Dale, R. & Robertson, S. (2012) Towards a Critical Grammar of Education Policy Movements, Steiner-Khamsi, G. and Waldow, F. "World Yearbook of Education 2012, Policy Borrowing and Lending in Education", Routledge, pp.21-40.

Grek, S. (2012) Learning from Meetings and Comparison, Steiner-Khamsi, G. and Waldow, F. "World Yearbook of Education 2012, Policy Borrowing and Lending in Education", Routledge, pp.41-61.

Jakobi, A. (2012) Facilitating Transfer: International Organisations as Central Nodes for Policy Diffusion, Steiner-Khamsi, G. and Waldow, F. "World Yearbook of Education 2012, Policy Borrowing and Lending in Education", Routledge, pp.391-407.

Phillips, D. & Ochs, K. (2003) Processes of Policy Borrowing in Education: Some explanatory and analytical devices, Comparative Education, Vol. 39, No. 4, pp. 451-461.

Silova, I. (2012) Contested Meanings of Educational Borrowing, Steiner-Khamsi, G. and Waldow, F. "World Yearbook of Education 2012, Policy Borrowing and Lending in Education", Routledge, pp.229-245.

Spring, J. (2008) Research on Globalization and Education, Review of Educational Research, Vol. 78, No. 2, pp330-363.

Steiner-Khamsi, G.（2002）Re-Framing Educational Borrowing as a Policy Strategy, Caruso, M. und Tenorth, H.E., Internationalisierung- Internationalisation, Frankfurt am Main, Germany: Peter Lang, pp57-89.

Steiner-Khamsi, G. (2004) Blazing a trail for policy theory and practice, Steiner-Khamsi, G. "The Global Politics of Educational Borrowing and Lending", Teachers College Press, pp.201-220.

Steiner-Khamsi, G. (2012) Understanding policy borrowing and lending, Steiner-Khamsi, G. and Waldow, F. "World Yearbook of Education 2012, Policy Borrowing and Lending in Education", Routledge, pp.3-17.

Sterner-Khamsi, G. (2014) Cross-national policy borrowing: Understanding reception and translation, Asia Pacific Journal of Education, Vol. 34, No. 2, pp.153-167.

Taufe'ulungaki, A. (1993) Educational provision and operation: Regional dimensions in the South Pacific, Bacchus, K. and Brock, C. "The Challenge of Scale: Educational development in the small states of the Commonwealth", The Commonwealth Secretariat, pp.120-141.

奥田久春（2018）「大洋州における中等教育試験制度の変遷－ PSSC の廃止に着目して」『三重大学教養教育機構研究紀要』第 3 号，25-34 頁

奥田久春（2019）「大洋州共通の後期中等教育試験 PSSC に関する考察－地域共通の試験制度の意義－」『三重大学教養教育院研究紀要』第 4 号，9-17 頁

佐藤仁（2018）「教育借用から考える『場』としての規範的比較教育政策論の可能性」『比較教育学研究』57 号，13-31 頁
田中正弘（2005）「教育借用の理論－最新研究の動向－」『人間研究』（日本女子大学人間社会学部教育学科）第 41 号，29-39 頁
二宮晧（1996）「比較教育学の研究法，要因分析法，段階比較法および仮説検証としての比較方法」吉田正晴編『比較教育学』福村出版，28 頁
日本比較教育学会編（2012）『比較教育学事典』東信堂
山本吉宣（2008）『国際レジームとガバナンス』有斐閣
ユルゲン・シュリーバー著、今井重孝訳（2000）「比較の方法と外化の必要性－方法論的諸基準と社会学的諸概念—」ユルゲン・シュリーバー編著、馬越徹・今井重孝監訳『比較教育学の理論と方法』東信堂，29-83 頁

註

1　教育政策が移転していくことを表わすには、事例や内容に応じて様々な用語がある。例えば Adoption, Implementation, Mobility, Attraction, Borrowing, Lending, Travelling, Transfer, Learning, Diffusion, Convergence などの語が用いられるが（Jakobi, 2008）、概念としては Educational Policy Borrowing（教育借用）といわれることが多い。

A Study on the Regional Harmonization in the Educational Policy Borrowing

Hisaharu OKUDA

Abstract

This study aims to inquire how the perspective of region can be recognized in the educational policy borrowing theories in comparative education. Following questions were considered: the opportunities that organize regional harmonization in education, the processes, and the effects that may results. In this article, I focused on the harmonization that Steiner-Khamsi suggested in her study and classified some new trends of educational policy borrowing.

Based on those theoretical studies, I discussed that international bodies play roles to organize regional harmonization in education. In other cases, educational reforms toward decolonization and international standardization can be opportunities to form regional harmonization in education .

However, in any case, we should recognize the countries that have bilateral relationship do not merely borrow educational policy in the region, but interact with each other to learn. We should also recognize a nation state and its educational policy at multi-level. Also there should be a lot of local contexts in education. Regarding the effects of the regional harmonization on education in each country, various conditions can be considered.